



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

田舎嘆きの10ヶ条から 田舎楽しみの10ヶ条へ



昇る夕日でまちづくり 2000年12月
アトラス出版

今から20年程前の2000年末に発刊した、「昇る夕日でまちづくり」という自著本に、「田舎嘆きの10ヶ条」という、当時としてはかなりショッキングな中見出し名の記事を書きました。これはその当時、自宅の敷地内に造っている4畳半ほどの囲炉裏を切った、青年たちのたまり場である、小さな私設公民館「煙

会所」に、新しくつくったまちづくり青年会議の30人のメンバーを集めて開いた集会で、「まちづくりにおける若者の果たす役割」、期待を込めて熱っぽく語った私の話への、若者たちの冷めた反応意見をまとめたものでした。

田舎嘆きの10ヶ条

- 第一条 田舎には仕事がない
- 第二条 田舎には活気がない
- 第三条 田舎には文化がない
- 第四条 田舎には嫁さんが来ない
- 第五条 田舎にはプライバシーがない
- 第六条 田舎には遊ぶ場がない
- 第七条 田舎には狭い道しかない
- 第八条 田舎にはいい店がない
- 第九条 田舎には情報が遅くて少なくとも古い
- 第十条 田舎には信号が三つしかない

私は若者の嘆き節を聞きながら、「こんな気持ちで若者がこの町に住み続けても、町は決して良くならないし、若者たちの人生もダメになると思い、「何ちゃやない」と二言目には諦めの言葉を発する若者の心を替えるべく、「何ちゃやないなら何でもできる」と開き直り、嘆きの

一つ一つを若者たちと一緒に考えながら勇気づけました。思うに第一条の「田舎には仕事がない」のではなく、仕事を作り出せないのではないのか。日本全国を旅するといいい町には必ず挨拶ができ、公衆トイレが綺麗で花が咲いています。この3つの条件の揃った町は住んでも訪ねても快適で、それらは住む人たちがボランティア活動で守り育てる、これぞスワンの仕事なのだと思われ花づくりの大切さを訴えました。また第二条の「田舎に活気がない」という話も、活気がないのは自分であると考えれば、人口がたとえ5千人でも一人が二馬力持ったら一馬力になるはず、要は町民一人一人がどんな馬力を持つか、その人間力の総合で地域の活気は生まれる、まさに「源私力」だと説きました。さらに第三条の「文化がない」も文化がないのではなく、文化の本当の意味を知らな過ぎたのであり、文化会館を建て、東京発の芸術文化に触れることだけが文化じゃなく、近所のおばちゃんの持っている生活の知恵も、野の花を活けて楽しむことも、農業漁業そのものも生活文化なのです。私流に言えば「文化とは人間がよりよく生きるために考えを形にする営み」